

釣れ釣れなるままに

2004年思い出の釣行記 PART. 6



ハッピーマンデー

岩見沢釣遊会第4回大会

☆開催日	平成16年7月18日
☆開催場所	冬島港～エリモ港
☆入釣場所	近浦
☆潮	満潮 02:45 151cm
	干潮 10:12 19cm
☆釣果	アブラコ 380mm 2
	カジカ 350mm 3
	重量 3900g
☆成績	合計点数 1120点
	成績 重量優勝
	持ち点 1点
	累計点 55点 (②50②①)

今年からハッピーマンデーに「海の日」が加えられ、3連休がまた増えた。この「海の日」こそ私たち釣り人は海に繰り出さなければならないだろう。釣遊会もそれを意識してか、この連休中に釣り大会を充てた。次の日の勤務を気にせず大いに海に親しもうという主旨を生かした粋なはからいである。

入釣場所を

- ① 山中が解禁になった。山中トンネル前に駐車帯が出来たのでそこで会員を降ろすこともでき、東山中方向に向かったの釣りも許可された。大アブラコが私を待っていそうな気もするが、嫁を確実にとる自信がない。
- ② 幌満川河口でアカハラをとった後、幌満トンネルの南口から旧国道を戻り、ルランベツ覆道裏でアブラコを抜く。しかし、旧国道は昆布取りの漁師には開放されているらしいが崖崩れがいまだに多いために通行止めになっており、釣り人が紛れ込むと漁師にお叱りを受けるらしい。
- ③ 第3回大会の帰途にバスの中から見た旭覆道、西旭覆道の裏辺りが魅力的であった。しかし、慣れないというより一度も入ったことのない釣り場で満潮や干潮に対応することが出来るであろうか。
- ④ 昨年の10月の大会で上近浦から下近浦まで何度も歩き、満潮時や干潮時の舟揚場の先の様子や溝、下り口も確認している。澤田隆郎氏から聞いて狙ってみたい溝もある。そして、なにより昨年の悔しい思いを払拭したいというリベンジの意味もある。しかし、近浦は秋の釣り場と聞いている。果たして、夏のこの時期魚はいるのであろうか。

と思惑を巡らし、バスの中での情報集めとなる。しかし、今一ぱったものはなく釣り場が決まらない。どこの情報か定かではないが、皆、山中でおりにていく。いつもなら私もとついていくところだが、その足が1歩踏み出せない。やっぱり、自分には近浦でリベンジしたい思いが強いのだろう。ハッピーマンデーでは是非とも近浦での大釣りの余韻を楽しみたいものである。

狙いの溝には

近浦の舟揚場前で荷物を下ろした。一旦、空身で上近浦方面へ歩いてみる。干潮時に出入り口がなくなってしまう湾洞には『夢』の会員が一人おり、昨年の秋に50cmのカジカをあげたので今年も狙っているという。昨年秋に澤田隆郎さんが入っていた防潮堤から引き離されたコンクリート階段下には誰もいない。一番の狙いとしていた次の階段下の溝にも誰もいないが、そのすぐ左の平磯に金漁会の会員が一人打っていた。その御仁に対する遠慮もあるが、狭い釣り場に二人ではどちらも成果が上がらないと判断し、荷物を置いた場所に戻る。ここも澤田隆郎氏から教えていただいた溝である。前回は時化で溝を見つけられなかったが今日は海が凪いでいるのに加えて、溝の証拠となる磯舟が一艘置いてある。

竿2本をゴロ天秤仕掛けで近投、1本を沖の駆け上がり付近を狙って遠投する。海は静かだ。足場も砂利原で快適であり、人影も見当たらない。今日は穏やかな釣りができそう

である。しばらく、ゴロとコマセを打ち続けて、それが効いてきた1時半ころ、ゴンゴンと大きなアタリが出た。百円ライター大に切ったカツオをすっぽり飲み込んだ35cm程のカジカがあがった。その後も型は小さいがカジカとハゴトコが来て、一応2魚種5匹が揃った。

アタリの遠のいた満潮時の2時半、もう一度、右方向にいた釣り人2名に様子を聞いてみる。湾洞の中を狙っていた釣り人はハゴトコのみ釣果であり、階段下の平磯ではカジカも含め一応5匹は揃ったということである。

ついでに、近浦の湾洞に入った仲間の大前氏の様子を伺いに行く。するとすぐ隣に誰かいる。上近浦で降りたはずの嵐氏である。風が強く、ゴミも寄って釣りにならないので移動してきたようである。どちらもハゴトコのみということで自分の釣り場に戻る。遠投でアブラコ35cm、カジカ35cmと続いた。

見慣れなくなった風景

背後の山並みが薄明るくなり、漁師がやって来た。4時半には昆布取りの舟を出すと言うので、仕掛けを取り込んで待つことにする。舟が出た後この舟揚場で釣りをしても迷惑が掛からないかを聞いてみる。

「舟揚場には何度も昆布を置きに戻るのだから邪魔になるが、その両脇では釣っていても大丈夫だ。しかし、舟揚場の背後に広がった玉石原で昆布干しが始まる。昆布取りが終わるのは8時だと思うが、今日の天気でははっきりしない。9時になるかも知れない。最近は天候が荒れて漁をしていないので、皆必死なのだ。」と答えてくれた。

間もなく昆布取り開始のサイレンの音とともに一斉に昆布取りの舟があちこちから出て来て、20艘ばかりの舟が私の目の前の磯の駆け上がり付近に集結した。ちょい投げは可能だが遠投では舟に直撃する距離である。コントロールもままならない私の腕では釣り続けることは到底無理である。引き潮にかかってきたので近投だけでは望み薄だろう。

舟揚場から離れて、昆布干し場への浸食を防ぐために積み上げた大きな碎石の上で仕掛けを竿からぶら下げたまましばらく昆布取りの様子を見学することになる。本日は日曜日なので小さな子どもたちも出て、昆布干しのお手伝いをしている。学齢期前の子どもは手にお弁当の大きな風呂敷包みやお茶の道具等をぶら下げている。こんな風景は都会では全く見られなくなった。家族の生活を支える営みに直接触れるような環境からは、都会のもやしっ子にはない逞しい生活の臭いのする子どもたちが育つだろう。



岩が小さくなった

昆布取りの舟が戻ってくるのを待っている老漁師と話す。

「沖にあった大岩が小さくなってすもうた。」堀内氏が近浦への入釣時に目印としている大岩のことだろう。

「ここら一帯、以前とはすっかり様変わりすすもうた。そら、そこにコンクリートの階段があるじゃろう。あれだってちゃんと防潮堤にひっついとったんじゃ。防潮堤との間に立派な木の橋桁があつてのう、それを利用して昆布を上げとっちゃんじゃが、去年の地震の津波で、根こそぎ持っていかれてすもうた。それから、最近はずっかり潮が高くなってすもうて、昆布乾し場が狭うなった。」

潮が高くなるなんてことがあるのだろうか。私の怪訝な顔を察したのか、代わって他の漁師が言う。

「昨年の浦河沖地震で、この海岸線の地盤が沈下したんだ。」

なるほどと肯く。

昆布取りの状況に変わりはなく、お年寄りも子どもたちも甲斐甲斐しく働いている様を見てみると、そこに釣り竿を置いていること自体が恥ずかしいことのように思えて、いたたまれなくなり、移動することにした。再び他の場所の選定に辺りをうろつく。

上近浦方面を迂回してから中近浦方面に向かう。近浦の湾洞でも大きな舟揚場からけたたましいスクリー音を立てながら昆布取り舟が出入りしている。場所は少し移動しているものの相変わらずその湾洞の騒音の中で嵐氏と大前氏が粘っている。どちらにもアブラコが来たようだ。

近浦バス停前の階段では「夢」の会員が2名おり、階段の上に釣り座を構えていた御仁の網魚籠には、アブラコの40cm級が今まさに釣り上げられたという面持ちで収まっていた。階段下の御仁は、最初に入った中近浦の舟揚場でカジカとアブラコを揃えて、どちらも40cmあると言う。沖には昆布取りの磯舟がいるが、土管前から延びている溝では釣りができそうである。

昆布取りの舟をかわして

荷物を取りに戻って、土管前の溝で打ち始める。アブラコ38cmがきた。カジカ35cmも来た。しかし、これからと思っている矢先、土管前の狭い溝にも昆布取りの舟が一艘近づいてきて、またまた仕掛けを投げ入れることが出来なくなる。

潮が引き始めて前の岩に渡れそうになってきたので、先行者に「岩場にあがるのなら先にあがってください。私は、お二人が場所を確保した後に、空いているところに入らせていただきますから。」しかし、なかなか出て行かない。他に渡れる岩はないかと物色して歩き回るがなかなかこれといったものがない。そのうちようやく先行者が場所を確保したようだ。先行者は岩場の先端から右側の湾洞に向かいちょい投げしている。左先端が空いていたのでそこに入らせていただく。もちろん「隣に入れてさせてもらいます」と挨拶してから入ったが、無言で黙々と釣っておられた。

私が竿を出していた土管前を振り返ると一斉に磯舟が集結している。私が釣っていたので遠慮していたのだろうか。もしそうだとすると大変申し訳ないことをしていたわけだ。異動先では昆布取りの舟が全くいなくなった。あずましく釣りが出来る。8時半、忙しい思いをする程のアタリはあるもののハゴトコばかりである。昆布取りが終わってそこにいた虫を食べに来ているのだろう。ハゴトコに混じってなんとか38cm程のアブラコを手にしたが後が続かない。終了間際にも、アブラコの45cm級が昆布の上を滑りながら目の前まで来ていたのだが、掛かりどころが浅かったのか外れてしまった。

前回の大会では思ったより早くバスが来たので早めにあがることにする。

鹿島釣狂さんですか

先にあがっていた「夢」の若い会員と再度挨拶を交わす。『北海道の釣り』に記事を書いているかと聞かれたが、記事に写真が載っていたのはもう3年前にもなるのだがよく解ったものだ。

「鹿島さんの『釣れ釣れなるままに』をよく読んでいます。噂によると職業が〇〇と聞いていますが、大会に参加できるようにと願っています。鹿島さんの今日の釣果は1100点ぐらいですか？ 私もそれぐらいはとりました。今後お互いに頑張りましょうね。」

自宅に戻ると『北海道の釣り』8月号が届いていた。早速ページをめくると「年間優勝者が明かすポイントガイド」に話し掛けてきた御仁の記事が掲載されていた。その主は五十嵐保幸氏であり、札幌鉄東釣友会での年間優勝の記事である。五十嵐幸夫氏はよく耳にしていたが彼のお父さんらしい。

審査結果は

審査結果

優勝	鹿島釣狂	1120点	(アブラコ380mm+カジカ 350mm+3900g)	近浦
準優勝	山岸伸	1066点	(カジカ 383mm+アブラコ348mm+3350g)	上近浦
3位	前野達志	994点	(アブラコ361mm+カジカ 336mm+2970g)	琴似
4位	庄司幸吉	921点	(アブラコ360mm+アカハラ345mm+2160g)	冬島
5位	堀内正博	817点	(アブラコ438mm+ mm+3790g)	山中
身長優勝	吉井博	44.0cm	(アブラコ)	山中

で、今年度初の優勝となった。山中に釣り場を求めた優勝候補のメンバーが、アブラコの型ものを揃えていたのだが、皆さん嫁が取れなくて下位の成績になったのが幸いしたらしい。

自己責任

6月の大会で札幌のある著名な釣りのメンバーに事故があった。エリモ第7下り口から離れ岩に渡った釣り人が海に落ちて行方不明になったのである。そして、その1ヶ月後に室蘭地球岬沖で発見された。釣りの役員は大変な打ち拉がれようである。ある役員は魚やエサを保存するための冷凍庫を処分した。また、別のある役員は竿までも処分したとのことである。釣りそのものをやめるらしいという噂話がまことしやかに流れてくる。当然、大会は当面自粛せざるを得ず、会の存続そのものについても、臨時総会を開いてその行く末を決定するとのことである。

イラクの日本人人質事件で自己責任論が脚光を浴びた。何事につけ自分の行動に責任を持つのは当然のことなのだが、事がことだけに改めて考えさせられたわけである。それは人質解放のための要求が日本政府へのイラクからの自衛隊撤退を交換条件にしているという極限状況下での取引だったからである。人道支援をとイラクに自衛隊を派遣した政府に責任があるのか、それとも危険を承知で出かけた3名に責任があるのか。人質を取って自分の思い通りにことを運ぼうとすることこそが野蛮で卑劣な行為であるのは間違いないのだが・・・。

自由には責任を伴う。今回の事件は「危険な地帯へ行く自由」と「安全を代償としての自由」として考えてみないと、問題の本質を見損なうことになりかねない。バーナード・ショーは「自由は怖い。自由は責任を意味する。だからこそ、たいていの人間は自由を怖れる」と記している。勝手なことをするのが自由なのではない。それは自由を怖れない行為である。自由には責任を伴うことがわかっていれば、自由を恐れ慎重に行動すると思うのだ。自由という人間の権利の重みを思えば、その重みに比例して責任も重くなる。その責任の重さを知っているからこそ自分の行動には自己規制を働かせるのである。自分の能力の範囲内でしか自由であり得ないのだ。

自由を怖れて何事も慎重になりすぎてもいけない。己の能力の限界を破り、限界を拡大していくのが己の「知性」であり「感性」でもある。現状の情報を基にして判断していく

のが「知性」であり、情報以外のもの、つまり想像力によるものが「感性」である。「感性」は机上では磨かれない。現場での実践を通して磨いていくものであろう。

大げさなことになってきたが、私はこれからも『北海道の釣り』や釣友との交流を基に知性を広げ、実践の釣りを通して感性を磨きながら、釣りをいつまでも愛していきたいと思うのである。自由の怖さを知り己に自己規制を掛けながら……。

【つれづれ】

○魚の処分

冷蔵庫で一晩寝かせる。写真を撮る。

全てを職場にもっていく。

具だくさんのカジカ汁：職員が野菜などを買いに走ったらしい。タケノコも入っており、昼食時に振る舞われた。

○年が明けた正月2日、カナダ屋で恒例の新年大売り出しがあった。田村氏が峰社長と幌向での幼なじみということで札幌の仲間を引き連れて（従えて）来店していた。「北の釣会」について訪ねると、今年は新たな気分で再スタートするということである。私は亡くなった仲間の供養のためにもその方がよいと考える。しかし、会としてもそうだが、会員としても慎重に慎重を重ね、自己規制を課しながら行動することが本物の供養というものだろう。